「凧の季節に」　2024年01月08日

「東京新聞」の「本音のコラム」を毎朝、楽しみに読んでいる。エジプト国籍を持つ師岡（もろおか）カリーマさんのコラムは、アラブ・イスラム世界に疎い私には、そうなのかと教えられることが多い。彼女のコラムには、小さい者を愛おしむ視点が明確に主張されている。昨年12月30日は「凧の季節に」と題するコラムを寄稿していた。イスラエルの空爆で亡くなったガザの詩人・リフアト・アル・アルイールさんが書き遺した詩を紹介していた。まずは、その詩を読んでいただきたい。

私が死ななければならないのなら
君は生きなければならない
私の物語を伝えるために
私の持ち物を売却するために
一切れの布を買うために
それと少しの糸と。できれば白くて長い尻尾がついたものを
ガザのどこかにいる1人の子供が
誰にも別れを告げず、肉親にも、自分にさえ別れを告げずにこの世を去った父親を待ちながら天を見上げたとき
凧が見えるように
君が私のために作ってくれる凧が空高く飛ぶのが見えるように
たとえ一瞬だけでも彼に愛で応えてくれる天使がいると思えるように
私が死ななければならないのなら
私の死は希望をもたらすものであってほしい
私の死はおとぎ話であってほしい〉

アルイールさんは44歳で、6児の父だそうである。生きなければならないと懸命に生きていたことは確かである。しかし、死ぬことも覚悟していることが分かる。その死が訪れた時は、自分の死によって平和への希望につながるようなものであってほしいと歌っている。ガザの人々は命が守られることを願い、平和が来ることを熱望している。しかし現実は、孤独の中で、いつ殺されるか分からない。イスラエルの攻撃は激しくなるばかりで、絶望的な危機的状況にある。

凧といえば、ガザでは子どもたちが、東日本大震災の被災地復興を願って、毎年3月に凧揚げをすることが知られている。アルイールさんは日本の被災者との関係を思い、凧が空高く飛ぶのを見、また、愛で応えてくれる天使の存在を望んでいる。ガザでは、 日本の支援で建設された住宅が爆撃・破壊されたそうである。日本人の善意が、同じ価値観を持つ同盟国（西側）からの武力供与によって粉砕された。善意を送るが、片方では、武力行使を是認している訳である。現在、日本からの武器が送られてはいないが、カリーマさんは、国会審議を経ることなく武器が輸出できるようになったと嘆いている。

ガザでは、既に2万人を超す死者を出している。更に、瓦礫の下に埋もれている行方不明の人々もいる。その70%が女性と子どもである。命を支えるインフラが破壊され、文字通りの「兵糧攻め」である。権力者たちの人の命を顧みない狂気が戦争を生み出す。その狂気を国際世論は押し留められないことが、何とも悲しい。毎月3日に、駅前でガザの休戦を訴え、少しばかりの支援金を出すだけで、無力感に苛まされているが、平和への声だけは上げ続けていきたいと思う。